

ドイツの経営経済学会第78回年次大会は、2016年5月18日から20日までバイエルン州都ミュンヘンのミュンヘン工科大学で開催された。言うまでもなくミュンヘンは、日本人によく知られた街であり、街には日本人観光客の姿も数多く見られた。

学会テーマは「企業家、会社とテクノロジーの役割——ビジネスリサーチの機会」というものであった。日本からの出席者は関西学院大学の深山明教授、中央大学の高橋宏幸・丹沢安治の両教授と筆者の計4人であった。ここ数年では日本からの出席者は最多であった。

18日は11時半からプレコンファレンスということで、専門雑誌の研究データ管理、大学は企業家精神をいかに伝えられるか、などのテーマが採り上げられたが、これは主催校、ミュンヘン工科大学の企業家センターという組織が企画したもののようで、特に目新しいものは見当たらなかった。

大会はこの日の16時から大講義室(Audimax)で始まり、いくつかの挨拶の後、Linde社のヴォルフガング・ビュヒエレ社長、インディアナ大学のディーン・シェファード教授による基調講演があった。企業家精神研究の機会、などというテーマでの話であったが、筆者にとってはなかなか問題を絞って考えるのは難しい講演であった気がする。

その後は、19日、20日とたくさんの個別論題テーマ、そして前述の一般テーマ「企業家、会社とテクノロジーの役割——ビジネスリサーチの機会」についていろいろな発表がなされた。それらは聞かたびになるほどと思わせるものはあったが、これは主として筆者の勉強不足によるものと思われるが、様々な、いわばバラバラな話があれこれと多数続く印象が強く、ドイツの経営経済学会の年次大会としては今までと比べると印象が強いとは言えないものだったのではないかと思ったのが、正直な気持ちである。

ミュンヘン工科大学はミュンヘンの街のど真ん中に位置する大学で、さらにこの学会の年次大会はキリスト教のPfingsten（聖霊降臨祭）に行われるということでPfingsttagungと呼ばれている。この日は州によっては休日となるが、バイエルン州ではPfingstenは休日ではなく、今回も他の教室では授業をやっていて、学内は学生が右往左往しているので、気分的にはあまり落ち着かない印象も否めない。Pfingstenが休日になる州での大会だと学内は静かで、雰囲気も違うものである。

19日19時からレーヴェンブローイケラーでパーティがあり、元会長のヴォルフガング・ヴェーバー、アーノルド・ピコー両教授と日本人参加者が親しく接してミュンヘンのビールを楽しむことができた。

来年は、スイスのザンクト・ガレン大学で開催される。これは1992年以来25年ぶりとなる。統一テーマは“From Insight to Impact - Erkenntnis mit Wirkung”である。この下で様々なサブテーマが掲げられることになるのであろう。